

古（いにしえ）の散歩道 「2」

昔は、神社やお寺は子供の遊び場でもあり、木々が茂る境内は森のごとく神秘的です。大きな木々の下を歩くと、真夏でも涼しく、不思議なひんやりした気配が感じられるときもありました。

大木の下などには太陽の日射しは少なく、ただ斜線となって木々の中を通過する金色の光の線が幻想的な、光景です。

そこに、大きな蝶、クロアゲハが悠然と浮かんでいて、そよ風に漂っているのを見ると、時間の流れを感じさせない。

山や川で暮らしたり遊んだ、いにしえの時代、山そのものが神の居るところであると言った、つまり、山そのものが神社の起源であると言う概念からすると、空間を飛び越えて遙か昔の世界に行った気がします。

神社には、多くの大木があり、草木や花が咲いていて、気候が暖かくなれば、うぐいすの鳴く声が聞こえてきます。真夏になれば、蟬の、何百、何千と言う鳴き声が連動して頂点に達したとき、生命の誕生、生命の力強さ、生命の起源に接したように思えます。秋になれば鈴虫とかの虫の音が聞こえ、夜になればその鳴き声を通して、秋の夜の神秘的な世界に吸い込まれて行きます。夜は神の世界であると言う概念も、なんとなく理解が出来そうです。最も、これは人里はなれた場所であったり、人工的な灯りの殆どない場所であったり、ひっそりして静けさが漂う山であったりします。

山奥、未開の原野、池、川、木々や自然の生き物の全てが、山の信仰と言った感性なのかもしれません。

昔の日本の住居の生活様式で、よく見かける庭には、完全に囲いにより遮断されていなくて、ニワトリを飼っていて、その庭に遊びに行くと、ニワトリたちが自然にむかえてくれるような気がします。又、庭には小鳥や野鳥なども立ち寄り、山との繋がりを感ずることが出来ます。リスやモグラ、タヌキ、狐なども出没して、山と民家が一体となっています。

庭の池や水槽には、鯉や金魚などを飼っていて、風が水の上を通過して、家の座敷を通り抜けると、真夏でも涼しく感じます。

日本には、その場所とか、その周辺とか、その家、池とか、神社や山などに住み着く、特別の生き物があると信じられていました。現在もそうであるかもしれませんが、それを主（ぬし）と呼び、霊力ある生き物であり、皆が敬いました。山の主（ぬし）がどのような生き物か、会ってみたいものです。

主（ぬし）と言え、庭先にときどき現れる、「しろ蛇」であったり、縁の下などに住む、「大がまがえる」であったり、海や湖に住む得体のしれない生き物

であったりします。池とか沼に棲む、「オオナマズ」は、水辺の生命連鎖の長として、なんとなく敬う気持ちを持ち、主（ぬし）と考え、そのような場所を大切にしましたものです。同時に、子どもたちは怖がって近づかなかったのも、そのような場所での水の事故は避けられたこともあったと思います。

又、湖に飛来する白鳥の中で、存在感がある白鳥が主（ぬし）であるのか、或いは、いにしえの時代には、神の化身であると信じられていたのかもしれませんが。

又、山などを探索していると、まれに現れる大蛇（だいじゃ）なども、それを見ると異様な感じがして、その場所が何か異次元の世界と繋がっているような気がして、これが「山のぬし」かもしれません。

庭先の手洗い場の、飾りの一切ない電球の、黄色く照らすぼんやりした光が、月の薄暗い光と混ざり合って、風で木の葉がざわめくときなど、一人で別の空間に居るように思えます。その別世界では、何が起こるか解りません。場所は特定出来ませんが、住み着いている「ためき」が、大きく映し出されて、大たぬきの出現により、何か違う世界と接したように思うこともありました、と言う「むかしばなし」を聞きましたが、その実態を探索したいです。

一人一人の個人を護ってくれる神、守護神を見つけることが出来れば、その人にとっては幸いなことです。つまり、守護神を見つけることができると、その人にとって、敬うべき神のような存在に接すると、展望が広がるのかもしれませんが。

守護神を探していると、山の大木に潜む生命とか、湖とか池に住む生命であったり、真夜中に風の音にまぎれて聞こえる、生命らしき存在の声であったり、焚き火の火の中から時々見える、形のない存在であったり、夜に現れるフクロウであったりするのかもしれませんが。

山の魂とは、山と川に住む、無数の生命であるのかもしれませんが。

2015.5.29





